

平成 24 年度 調査成果

(財)京都市埋蔵文化財研究所 吉崎 伸

[古墳時代]

- 1、寺戸大塚古墳
- 2、福西古墳群
- 3、本山古墳群
- 4、植物園北遺跡
- 5、法住寺殿跡 (下層)
- 6、西京極遺跡

[平安時代]

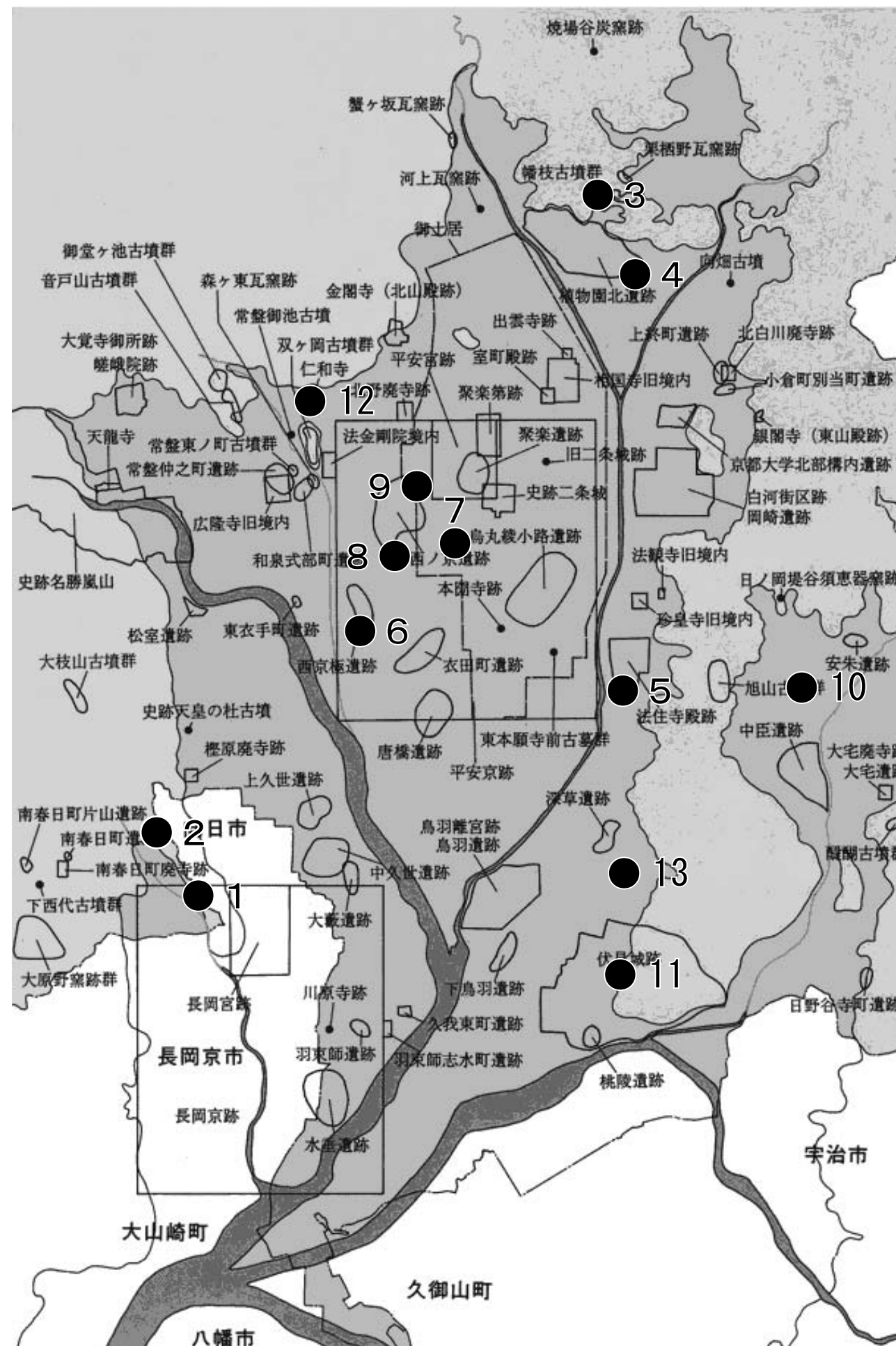
- 7、平安京右京三条一坊六町跡 (西三条第・百花亭)
- 8、平安京右京三条三坊跡
- 9、平安京右京二条二坊・西堀川小路跡

[室町時代]

- 10、山科本願寺跡

[桃山時代・江戸時代]

- 11、伏見城跡
- 12、仁和寺御所跡
- 13、西岸寺玉日姫御廟所



寺戸大塚古墳現地説明会資料

平成24年 9月22日
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

遺跡名 寺戸大塚古墳
調査地 京都市西京区大枝南福西二丁目ほか
調査期間 平成24年7月～9月末（予定）

1. はじめに

寺戸大塚古墳は、京都市西京区大枝南福西二丁目と向日市寺戸町芝山にまたがる、全長98mの前方後円墳です。同じ丘陵上に立地する五塚原古墳〔全長91m・前方後円墳〕、元稲荷古墳〔全長92m・前方後方墳〕、妙見山古墳〔全長114m・前方後円墳〕とともに古墳時代前期（3世紀中頃～4世紀中頃）に築造された乙訓地域の首長墳として位置づけられています。寺戸大塚古墳はこれまでに計10回にわたる調査が実施され、後円部3段、前方部2段の前方後円墳であることが明らかにされています。

京都市では、国庫補助事業として、古墳の保存を図るために計4回の発掘調査を実施し（平成18・20・21・今年度）、今年度の調査では、古墳の平面形態や構造を復元するための貴重な成果が得られました。

2. 調査成果

後円部（1トレンチ）

1トレンチでは墳丘裾平坦面、第1段斜面を検出しました。

第1段斜面の裾部には葺石が良好な状態で残存していました。葺石の葺き方として、人頭大ほどの大ぶりの石が基底石として長軸を横方向にして据え付けられ、その上に拳大の礫を下から上に葺き上げていることがわかりました。葺石の裏込め土には径5cm程度の小礫が多く含まれています。基底石のすぐ外側には樹立された円筒埴輪列が確認されました。おおむね3mごとに配置された円筒埴輪が5基検出されています。

前方部（2～4トレンチ）

2トレンチでは墳丘裾平坦面、第1段斜面、第1段平坦面、第2段斜面を検出しました。第1段斜面の裾部では葺石、第1段平坦面では礫敷きの施工を確認できました。

第1段斜面の葺石は、後円部（1トレンチ）の葺石に比べると、使用した石材の種類や大きさ、葺き方はおおむね共通しますが、裏込め土に小礫がほとんど含まれていない点が異なります。第1段平坦面には葺石よりも小さい円形の礫が敷かれています。

2～4トレンチの調査を通して、前方部西斜面の墳丘裾ラインは北から南に向かって外側に広がるわかりました。

3. まとめ

これまでに公表されていた墳丘測量図から、寺戸大塚古墳は前方部の両側辺が外側に開かず墳丘の主軸にほぼ平行する「柄鏡形」の前方後円墳として理解されていましたが、調査の結果、前方部の西側辺が外側に開くことが判明し、「柄鏡形」の前方後円墳ではないことが明らかになった点は新たな成果と言えます。

今後は、埴輪や過去の調査で出土した副葬品などの出土遺物を含めて、寺戸大塚古墳の築造背景を探っていく必要があります。

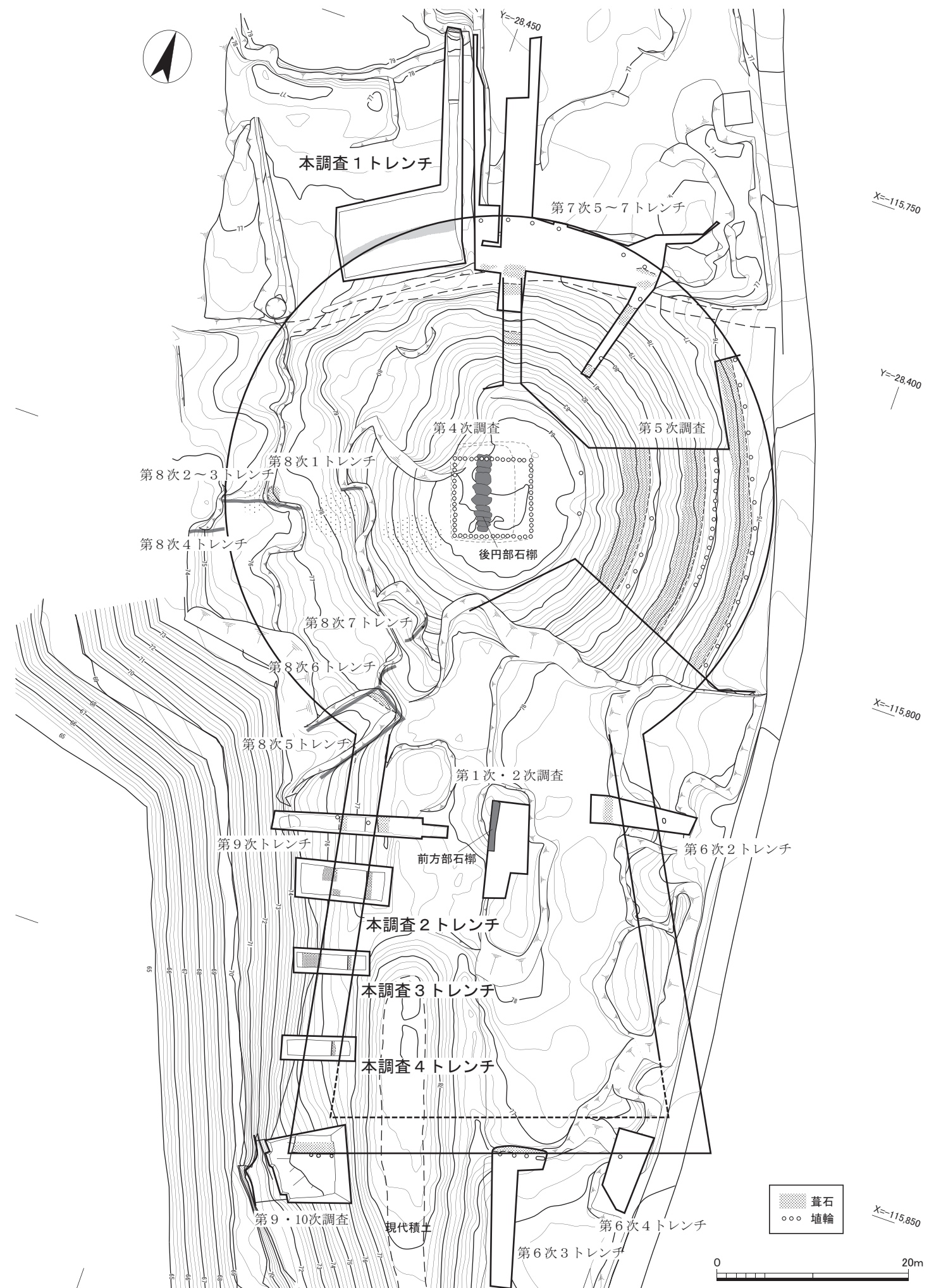


図1 寺戸大塚古墳調査区配置図

法住寺殿跡発掘調査現地公開資料 2

平成24 (2012) 年 4 月 28 日 (土)

調査地：京都市東山区本町通10丁目下池田町（京都市立一橋小学校跡地）

調査期間：2012年 1 月 11 日～ 6 月 30 日（予定）

調査主体：財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 <http://www.kyoto-arc.or.jp/>

1 遺跡の概要

一橋小学校跡地は、平安時代後期の法住寺殿の遺跡範囲に含まれています。1月から行っている発掘調査で、3月には、後白河上皇の妃である建春門院（平滋子）の発願した最勝光院の建物跡が初めて見つかり、現地説明会で多くの皆様にご覧いただきました。

その後、最勝光院造営時の厚い整地層を掘り下げたところ、奈良時代の掘立柱建物跡や古墳時代の竪穴住居跡・土器溜まり・土坑・溝など、たくさんの遺構が見つかり、現在調査を継続しています。

2 今回見つかった遺構

奈良時代の掘立柱建物跡が3棟見つかりました。建物318は、東西2間・南北3間以上の南北棟です。建物263・268は、両者ともに建物の南東隅を検出しており、西側に延びる東西棟の可能性がありす。柱穴は一辺約0.6～0.8mの隅丸方形から円形で、柱は直径約0.1mと比較的細いものでした。これらの建物跡は、正方位に近い向きに建てられています。

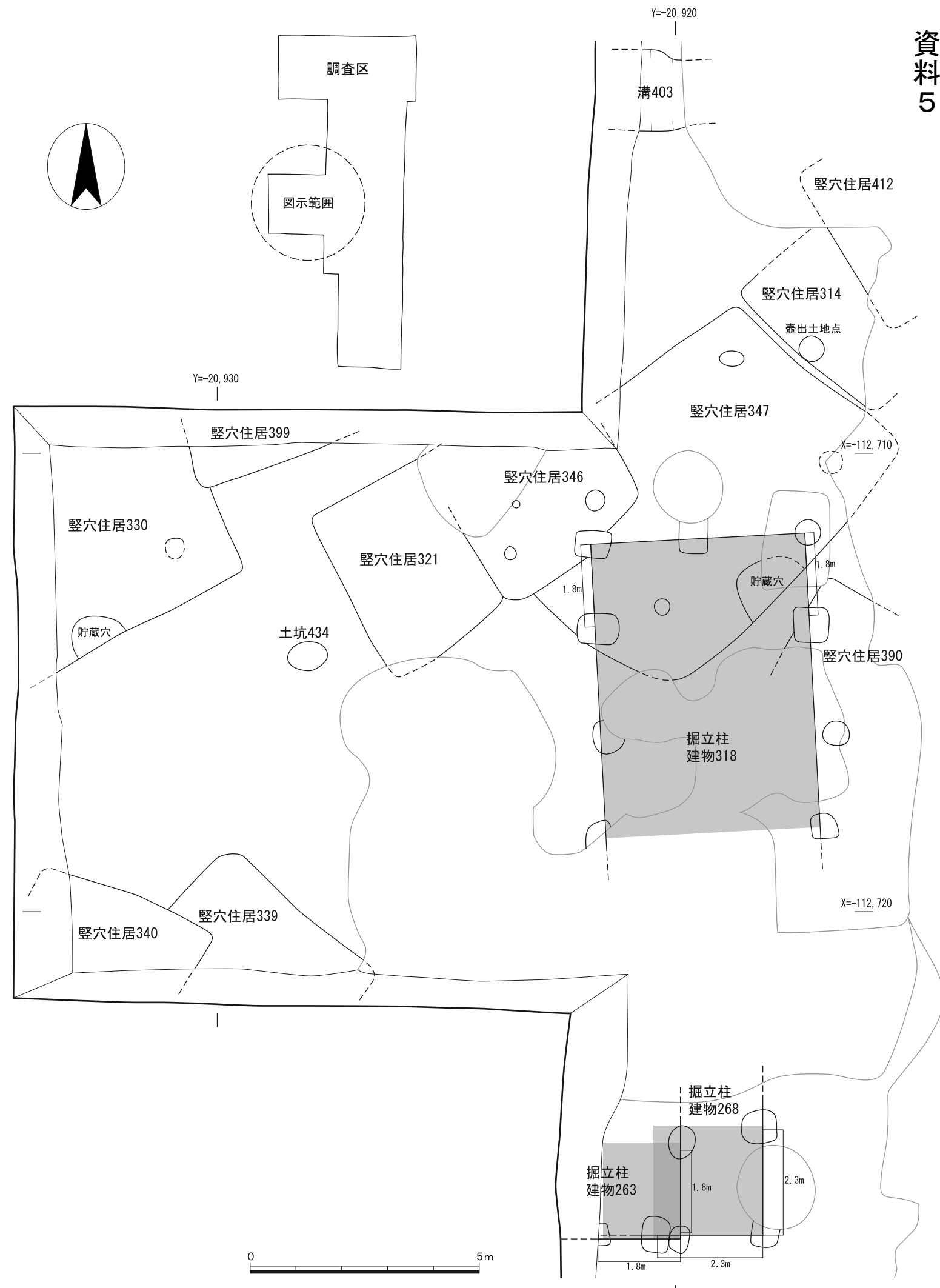
そのほか、古墳時代初め頃の竪穴住居跡が10棟見つかりました。狭い範囲内に竪穴住居跡が密集しています。同じ場所で1～2回建て替えられており、2～3棟が重複している箇所もあります。規模は一辺4～7.5mの方形で、深さは0.1～0.2m残っています。住居の床面では、屋根を支えた柱の跡や食べ物などを貯蔵した穴が見つかりました。また、壁沿いには溝が巡っています。これらの住居跡の方位は、おおよそ北西に向いています。

竪穴住居321は、焼けた土や炭で埋まり、強く焼けた炉があることから、何らかの工房であった可能性があります。

3 まとめ

当地は、平安時代後期の法住寺殿の遺跡範囲内でしたが、今回の調査で、その下層にさらに古い時代の集落跡とみられる遺構があることが判明しました。

この周辺では、これまで奈良時代や古墳時代の遺跡は見つかっていなかったため、今回が新発見となりました。奈良時代の建物の性格は今後の検討課題ですが、当地が古くから開発され、人々が暮らしていた土地であったことがわかったのは大きな成果です。



平安京右京三条一坊六町（西三条第、百花亭）

記者発表資料

2012年11月28日

(財)京都市埋蔵文化財研究所

調査地：京都市中京区西ノ京星ヶ池町17-59他
 (JR二条駅西側ロータリー西側)

調査期間：2011年4月4日～12月28日

経過：調査地は、平安時代前期に右大臣をつとめた藤原良相(813～867)の邸宅「西三条第」(百花亭)跡地と想定されていましたが、昨年の調査において池250から「三条院釣殿高坏」と墨書した高杯が見つかり、そのことが確実となりました。

さらには、この調査においては、仮名文字が記された墨書土器が多数出土したため、この間、その内容や記された年代等について慎重に分析、検討を重ねてまいりました。

つきましては、その検討結果について報告をいたしますとともに、池250の下層で見つかった井戸470(9世紀初頭)から出土した木簡の分析結果について報告いたします。

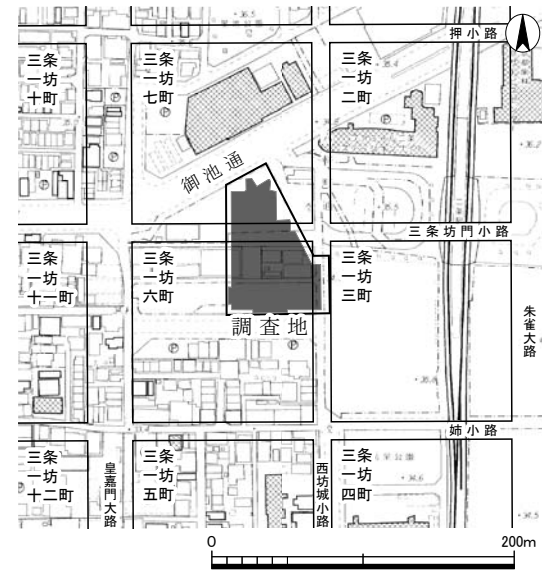
墨書土器：約90点出土しました。ほとんどが池250の西岸からの出土です。漢字、仮名、記号などありますが、漢字がもっとも多数を占めます。

仮名(資料3) 仮名は20点余り確認できます。墨14とした個体は最も破片が大きく、底部の全面に仮名が記されています。墨8・54は太い筆で仮名が数行記されています。墨66は高杯の脚部全面に細かな仮名が記されています。墨67も墨66と同一個体とみられます。

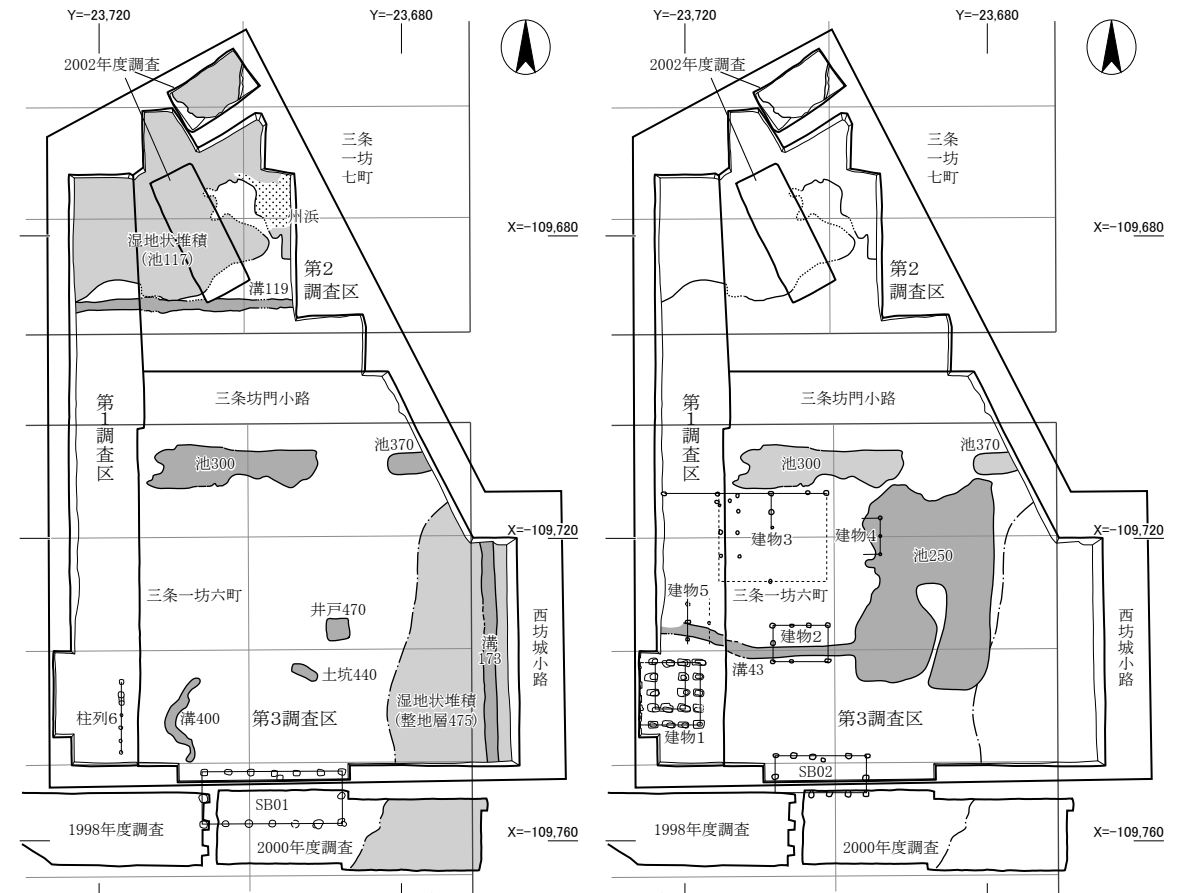
漢字(資料4) 墨64は高杯の縁に沿って「三条院釣殿高坏」とあります。墨65は高杯脚部の2方向に「政所」とあります。墨42は内面・外面に漢字を習書しています。墨43の「雑離」は经典の一部とみられます。墨62は高杯脚の内面に「膳所」とあります。墨71は須恵器壺の内面に「兵」の字が習書され、墨72は緑釉陶器底部に「四条」、墨74・75は灰釉陶器底部に「太一」と「庄」が記されています。墨82は井戸470から出土したもので、土師器碗底部に「酒杯」、墨79は池117出土須恵器杯底部に「専師」と墨書しています。

木簡：(資料2) 木2・4・5・6は井戸470から出土した檜扇で、橋がわずかに開いた状態に「奈尔波口都」が書かれています。木3の檜扇にも「奈尔皮口」がみられます。木8は讃岐国寒川郡(香川県さぬき市)からもたらされた荷札木簡で、片側を削り込んで鳥形木製品に改変されています。木17は池250から出土したもので、仮名が墨書された珍しい木簡です。

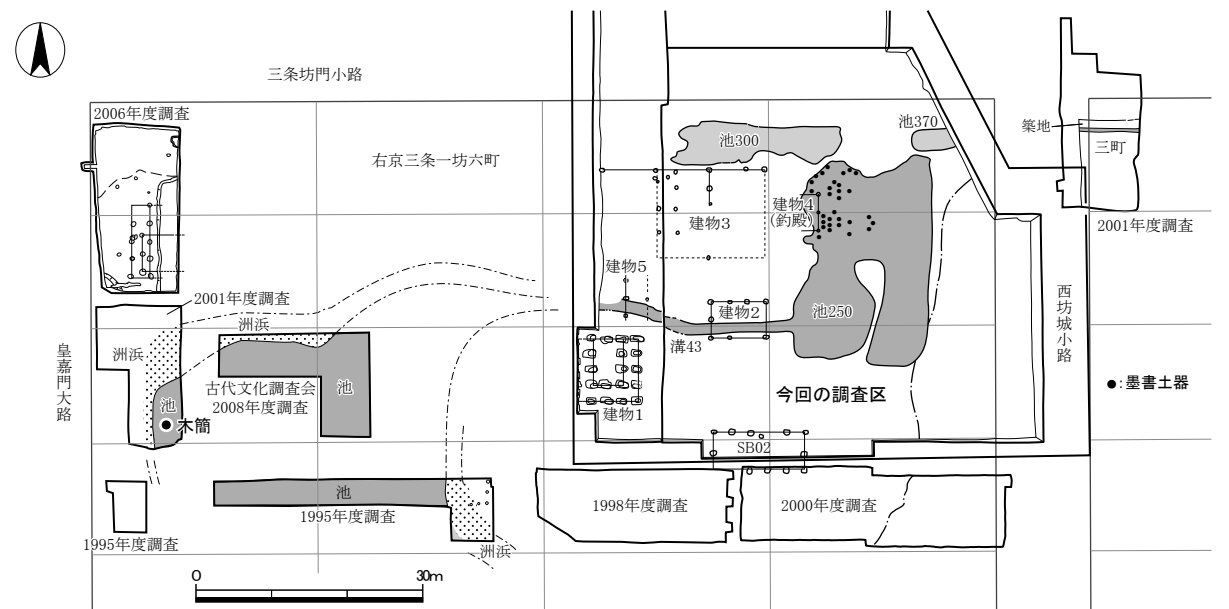
まとめ：墨書土器は9世紀後半から10世紀初めに属するため、平安京では最古の仮名文字と確認できます。「西三条第」の主であった藤原良相は文学に造詣が深く、また信仰心の篤い人物でした。しかし貞観8年(866)に起きた応天門の変では兄藤原良房(藤原氏初の摂政)と対立したことから、ほどなく失脚し、翌年死亡します。西三条第はその後しばらくして廃絶したようで、そのことは調査所見から推定できます。仮名を記した墨書土器は、これまで地方の役所跡などで少量出土していましたが、今回は9世紀後半に遡る可能性が高いことに加え、当時の都で名の知れた貴族邸内からまとまった量が出土しており、仮名文字の発生と展開に関する非常に重要な考古資料といえます。



調査地位置図 (1:5,000)



遺構の変遷図 (1:1,000)



西三条第北半部の遺構配置図 (1:1000) (2期に該当)

埋蔵文化財発掘調査 説明会資料

2012.05.31(木)

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

遺跡名 平安京右京三条三坊四町跡及び西ノ京遺跡(平安京以前の弥生～古墳時代の遺跡)
 調査面積 1,057㎡(調査区拡張箇所を含む)
 調査概要 調査区は平安京の条坊名で、右京三条三坊四町(120m四方)の北西部に位置している。

今回の調査では、東西の姉小路・南北の宇多小路と呼ばれる道路の側溝と、宇多小路の東側にあった築地と考えられる柱穴列を検出した。

調査区中央および南西部で、東西方向の建物跡を検出した。建物1は、地面に穴を掘り、柱を埋め込む掘立柱建物と呼ばれる建て方で、穴の底には柱が沈み込まないように板(礎板)が敷かれている。身舎(母屋)は、桁行7間(21m)、梁間2間(6m)で、南側に庇(約4.2m)が付く建物で、平安京跡内でも最大規模の建物跡である。

南西部では、同規模と推定される南北方向の建物2を検出した。そのほか、建物2の北側ではやや小ぶりの建物3を検出した。

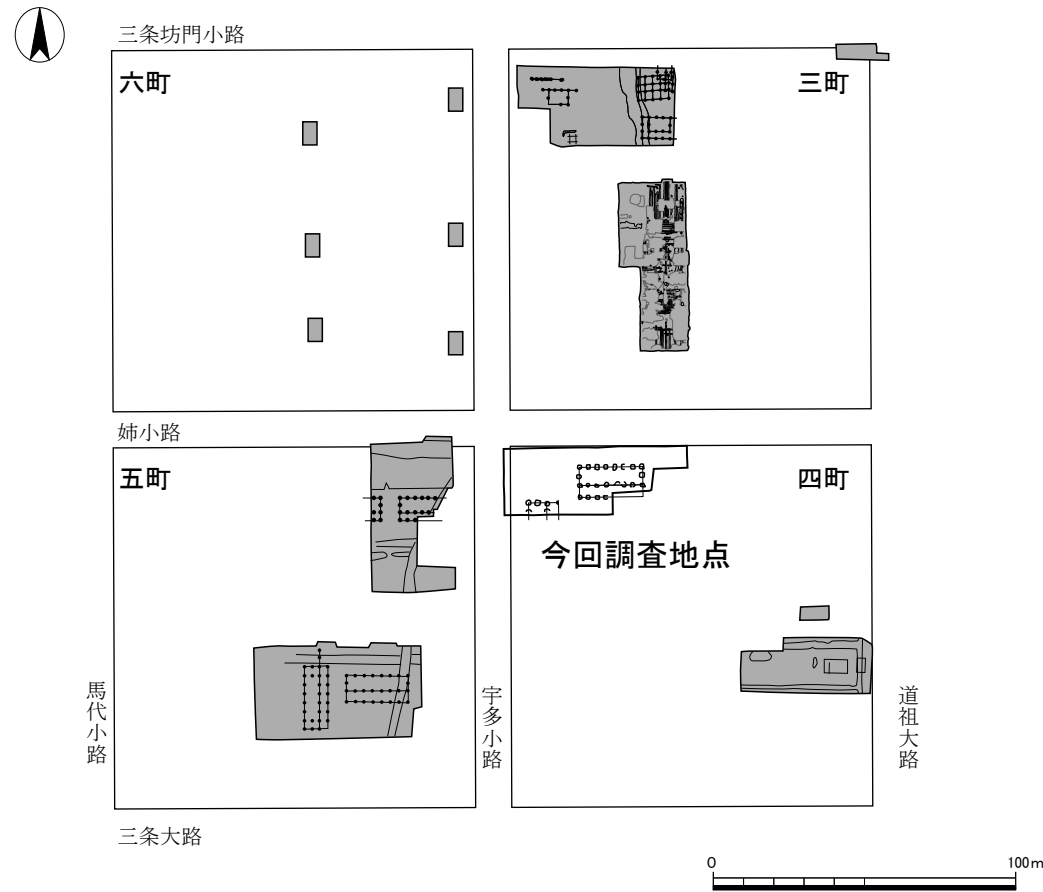


図1 調査区周辺図(S=1/2,500)

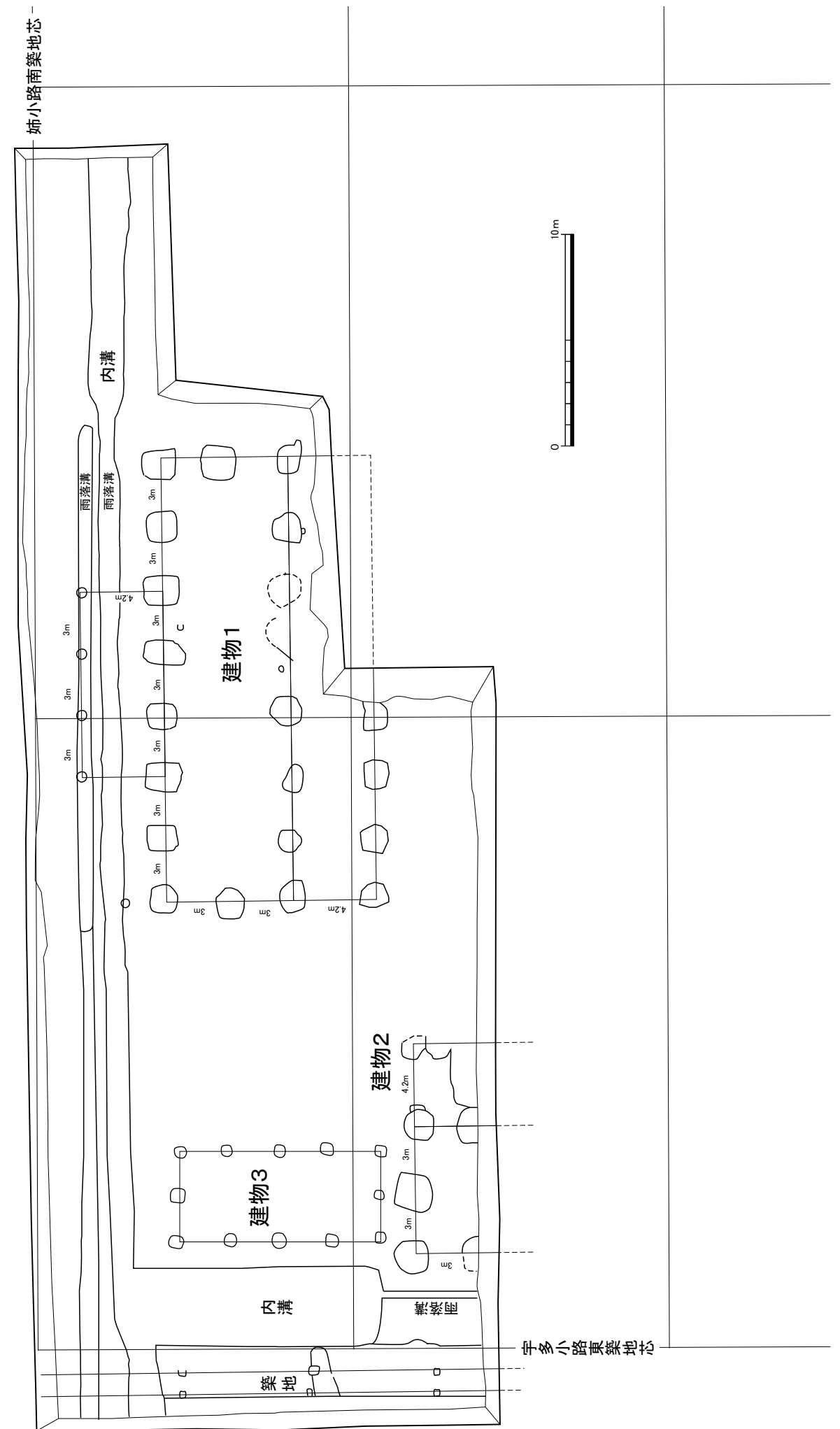


図3 調査区略図(1/250)

平安京右京二条二坊十一町・西堀川小路跡、御土居跡 発掘調査現地説明会資料

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
平成24年 8月18日

調査地：京都市中京区西ノ京笠殿町38 京都地方気象台構内
調査面積：1,257㎡
調査期間：平成24（2012）年5月9日～9月7日（予定）
対象遺跡：平安時代 平安京右京二条二坊十一町、西堀川小路
平安時代～室町時代 紙屋川（西堀川）氾濫堆積
桃山時代 御土居（土塁基部、堀）

はじめに

今回の調査は、京都地方気象台の構内に計画された、京都地方合同庁舎の建設工事に先立って行っている発掘調査です。調査は土置場の都合で、調査区を南半の1区と北半の2区にわけて行い、これまでに1区の調査を終えて、現在は2区の調査を行っています。

当地周辺の歴史

この地は、弥生時代から古墳時代の集落跡である西ノ京遺跡の東端に位置し、延暦13（794）年には平安京遷都によって平安京内となりました。

平安時代は平安京右京二条二坊十一町の南東部にあたり、東に面して南北街路である西堀川小路が通っていました。西堀川小路は、道路の中央に西堀川という人工の川を通す、京内でも特殊な道路です（図6参照）。西堀川は、紙屋川を一条通付近から真っ直ぐ南に通したもので、東の堀川とともに京内を南北に貫く運河として維持・管理されていましたが、氾濫が多く起こったために早く埋まったようです。

桃山時代、天下統一を成し遂げた豊臣秀吉が、天正19（1591）年に、京都の軍事的防御と洪水対策のために大きく京を取り囲む「御土居」を築きます。本調査地は西辺の御土居が南北に通り、その西側からは堀が検出されています。

江戸時代、御土居には竹が植えられて、角倉家が管理を任されていました。この辺りの御土居は明治時代まで形状が残っていたようですが、当該敷地の御土居は大正2（1913）年に京都測候所（今の京都地方気象台）がこの地に移転されるまでには壊されてしまっていたようです。

当地の南、約100mの西ノ京児童公園内には昭和40年代ごろまで御土居の高まりが残されていました。さらに南約300mの市五郎大明神の境内には東西の幅30m、南北の長さ40m、高さ約3mの土塁が現存し、国の史跡に指定されています。

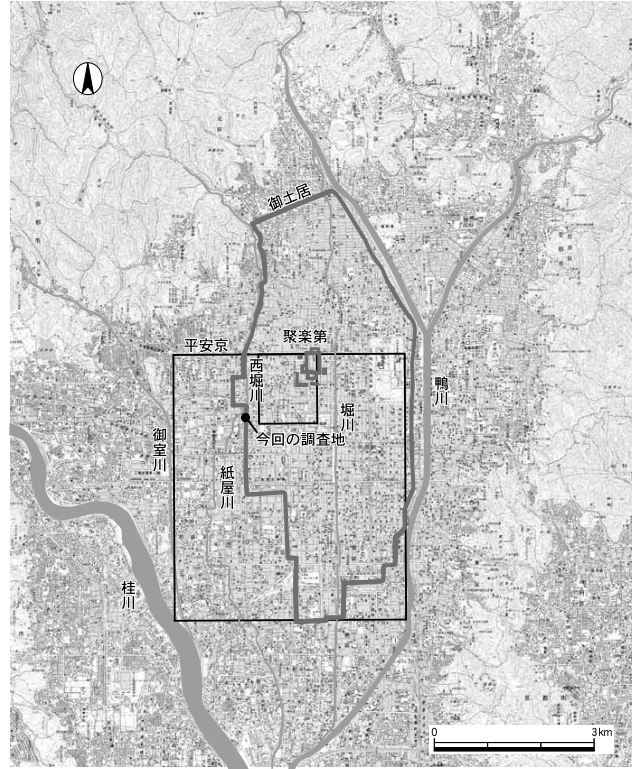
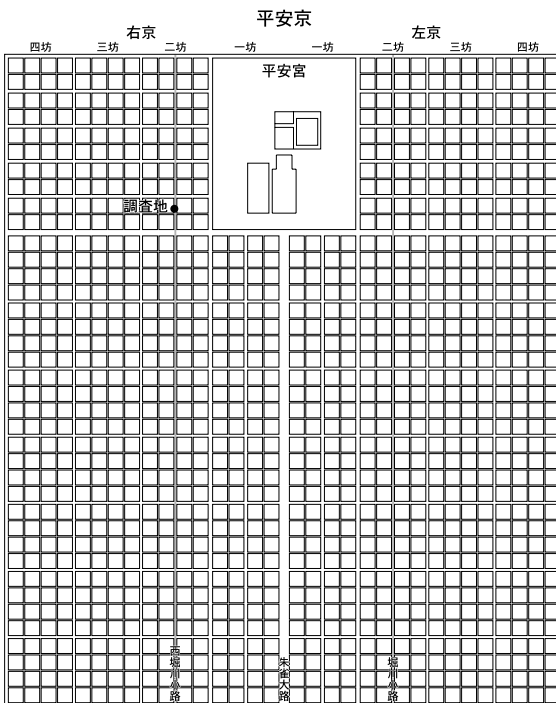


図1 平安京・御土居と調査地点図



平安京条坊図



図2 調査位置図

調査の成果

○桃山時代（今から400年前頃）

御土居に関連する遺構を検出しました。調査区の西半が御土居の堀、東半は本体が失われた土塁の基底です。土塁の西端には幅2m前後の犬走り状の平坦面が形成されています。ここでの土塁の高さは2～3mあったようですが、大正の頃には壊され土は堀を埋めるのに使われました。今回見つかった堀は深さ2m、幅14m以上あり、堀の西端は敷地外に伸びています。

堀の埋め土からは、明治時代以降の新しい遺物に混じって、平安時代の遺物も多く出土しました。

○平安時代から室町時代

御土居の土塁基部から下層の平安時代前期の西堀川小路までは2～2.5mの厚さの堆積層があります。これは西堀川（紙屋川）が平安時代以降に氾濫を繰り返した結果である事が今回の調査で明らかになりました。

現在のこの周辺の地形をみると、北側のJR山陰線高架の辺りから、西大路太子道を頂点として南へ広がる高まりが残っています。これは平安時代から暴れ川であった西堀川（紙屋川）が長い年月をかけて溜めてきた土砂の高まりと考えられます。昭和19年に流路変更工事によって西の御室川に合流させるまでは、洪水や氾濫を繰り返して周辺一帯に大きな被害をもたらしていたといわれています。

洪水土砂層からは、主に平安時代から室町時代までの土器類や瓦類、他に五輪塔なども出土しました。いずれも上流から流されてきたものです。

○平安時代前期（今から1200年前頃）

調査区の東半分が西堀川小路、西半分が二坊十一町にあたります。西半分の十一町部分は、後に築かれた御土居の堀によって壊されて残っていませんでした。西堀川小路部分は比較的良く残っており、道路中央の西堀川と道路の西側溝が見つかっています。西堀川の幅は約5m、東西の両岸には護岸のために檜の丸杭が何列も打たれています。西側溝は幅3.5～5m、中央が深く凹み溝で、道路側溝としては幅が広いものです。溝の中央には粘土質の土が堆積して、木製品や土器類、馬の骨などのほか、水晶製の数珠などが良好な状態で見つかっています。日常雑器ばかりではなく、何らかの祭祀に使われたものが多く見つかっています。

おわりに

今回の調査では、平安京の施工の時に西堀川として京内を南北に貫く形で維持・管理された紙屋川が、後に氾濫や洪水などを繰り返して土砂を堆積させていく様子が明らかになりました。その堆積は広範囲に及んでいたとみられ、右京が衰退する原因の一つとも考えられます。

当地には桃山時代に京都を囲って城塞都市化するために築かれた御土居が南北に通っています。明治時代以降に土塁本体の高まりはほぼ完全に削られて失われていましたが、今回の調査で外側の堀は深く、幅広く掘られていたことが明らかになりました。

御土居：天下統一を成し、京都を本拠地とすべく豊臣秀吉が手掛けた京大改造の仕上げとして京都を囲い込むために天正19（1591）年に築いた土塁と堀の総称。北は上賀茂・鷹峯、西は紙屋川から東寺、東は鴨川西岸、南は九条通まで、南北8.5km、東西3.4km、総延長は22.5kmに及ぶ。外側に堀を掘って、内側に土塁を築き、要所に切通しの出入口を設けた（京の七口）。正月に作り始め、5月までには完成したといわれる。内側は洛中、外側は洛外と呼ばれた。
西堀川小路：平安京右京の南北小路の一つ。他の小路（幅4丈：約12m）と異なり、幅8丈（約24m）であった。中央に幅2丈（約6m）の西堀川、その東西両側に幅2丈の道路敷き、さらに両側1丈ずつあって側溝、築地が設けられていた。西堀川は、現在は紙屋川・天神川とも呼ばれ、戦前に洪水対策で太子道付近から大きく西へ流路の変更工事を行って御室川へ合流させられるまでは、南へ流れて南区で桂川に注いでいた。

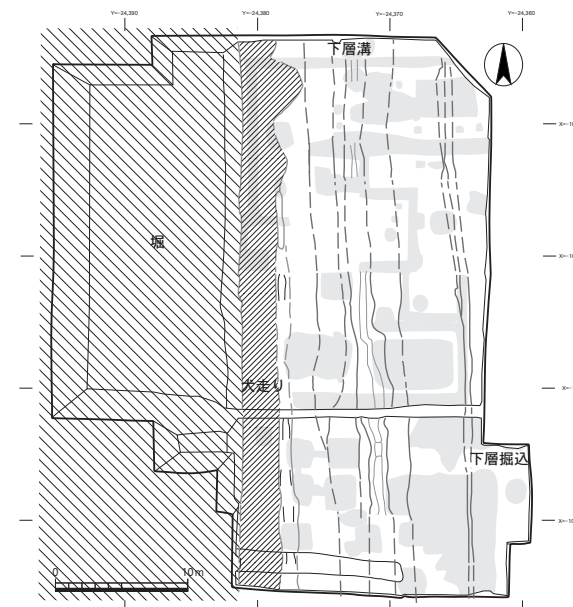


図3 桃山時代遺構平面図

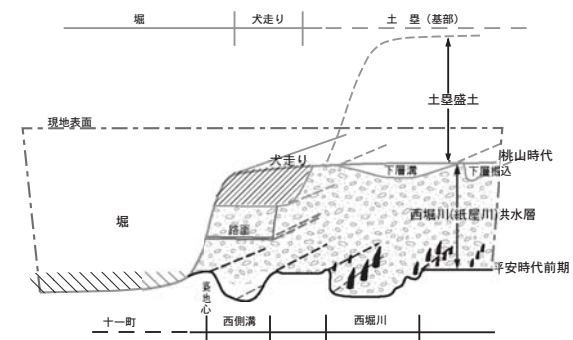


図4 遺構断面模式図

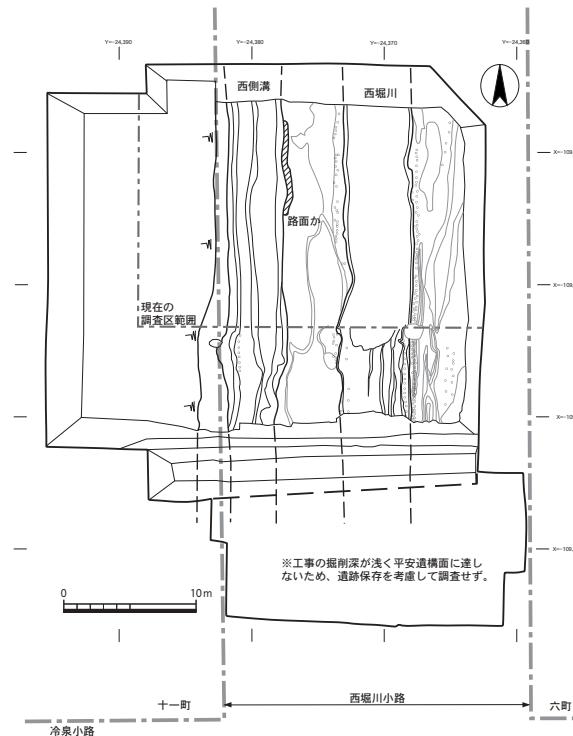


図5 平安時代前期遺構平面図

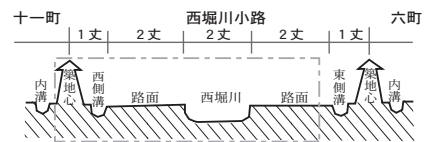


図6 西堀川小路断面模式図

山科本願寺跡発掘調査現地説明会資料

2012年9月8日

調査地：京都市山科区西野山階町地内

調査期間：2012年7月17日～9月下旬（予定）

調査主体：財団法人京都市埋蔵文化財研究所

遺跡の概要

山科本願寺は、文明10年（1478）に浄土真宗中興の祖・蓮如上人により造営が開始された浄土真宗の本山で、寺域は堀と土塁で囲まれ、阿弥陀堂や御影堂のある「御本寺」、有力末寺の坊舎のある「内寺内」、門徒の居住区のある「外寺内」の三つの郭で構成され、壮大な規模を誇っていました。將軍家や有力武家をしのぐほど繁栄しましたが、天文元年（1532）に管領細川晴元率いる近江守護職六角定頼と法華宗・延暦寺の連合軍によって攻撃され、焼け落ちました。

今回の調査は、山科本願寺跡の18次調査になります。当地が「御本寺」の中心部に近い場所にあたることから、文化庁国庫補助を受けて、遺構の保存状態を確認するため1区と2区を設けて調査を行っています。

見つかった遺構

石風呂遺構 1区南半では、石風呂・カマド・^{たたき}三和土・井戸1から成る一連の石風呂遺構が見つかりました。石風呂は地面から約1m掘り下げた半地下式構造で、南北約6m、東西は3m以上あります。北側が作業場を兼ねた前室、南側が石と粘土で固めたドーム状の天井がかかる蒸し風呂部分と考えられます。蒸し風呂部分は花崗岩の石組み、前室は河原石の石積みで東側には階段が付きます。石風呂の東には半地下式のカマドが位置します。作業場と燃焼室に分かれ、全長で南北2.5m、東西1.5m、深さは約1mあります。焚口と燃焼室は花崗岩と河原石の石組みで、この上に鉄釜を乗せて湯を沸かしたと考えられます。作業場には覆屋の壁土が焼けて倒れ込んでいます。カマドの南側は土間の三和土となっています。石風呂とカマドの北には井戸1があります。掘形の直径は約3m、深さは4m以上あり、石組みの井戸であったと考えられますが石は抜き取られていました。これら一連の石風呂遺構の東には塀の基礎と考えられる土坑が複数並んでいます。塀の東側では、昨年度の調査で見つかった坪庭の石組溝の延長部分の溝1が見つかりました。

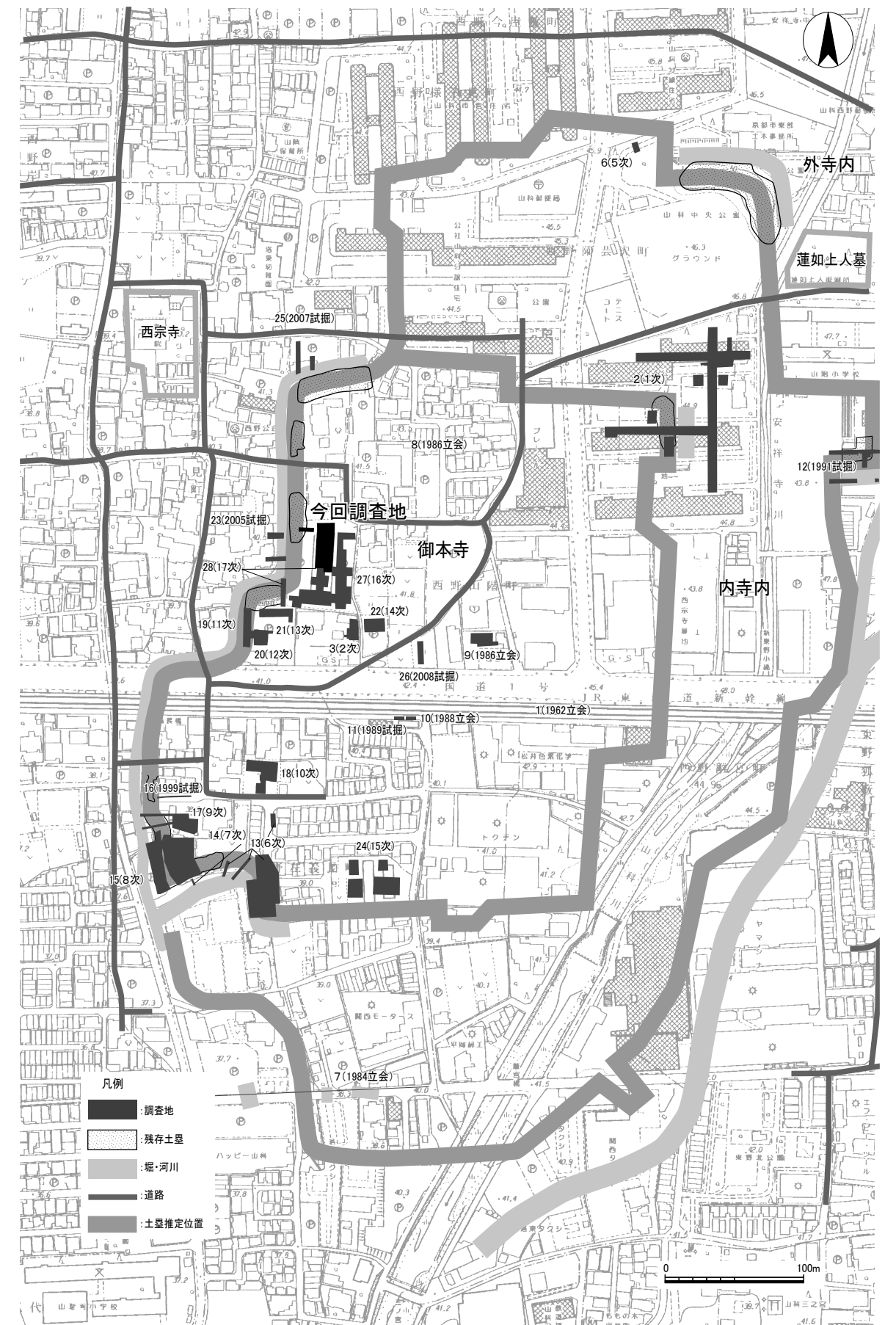
炊事施設 1区北半は整地により南半より一段高くなっています。この高まり上では、多数の建物の礎石や柱穴と共に井戸2が見つかりました。円形の石組井戸で、掘形の直径は約1.8m、深さは4m以上あります。埋土から焼けた壁土や炭化米が多量に出土しました。井戸の西側で見つかった南北方向の溝2からも炭化米が出土しており、この高まり上には炊事に関わる施設があったと考えられます。また井戸2から出土した壁土は非常に分厚いことから土蔵の壁土と考えられ、付近に米蔵などが存在したと推測されます。

土塁 2区では「御本寺」の西端を限る土塁の裾部が見つかりました。

まとめ

今回見つかった石風呂遺構や炊事施設は、「御本寺」の中枢部に位置することから、宗主一族も使用した可能性が高く、山科本願寺にとって極めて重要な遺構と言えます。

また、昨年度までの調査成果と合わせると、調査地一帯は、阿弥陀堂や御影堂の裏手に存在したと考えられる宗主一族の居住施設や寺の実務を執る施設群が展開する本願寺の内向きの空間であることが確実となりました。これは山科本願寺の具体的な復元に大きく寄与する成果と言えます。

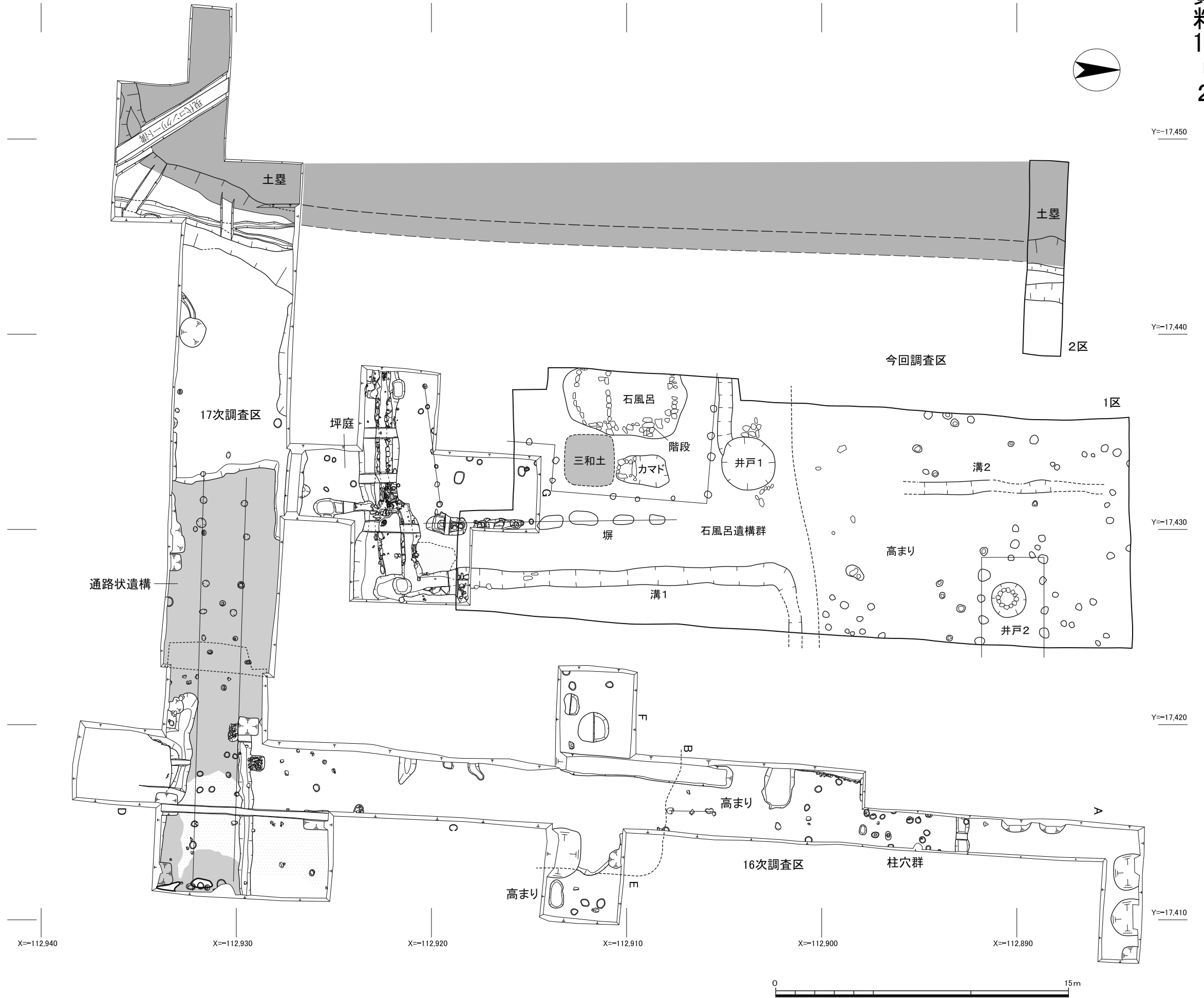




石風呂 (北から)



カマド (北から)



西岸寺玉日姫（たまひひめ）御廟所調査

2012年6月8日

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

遺跡名：西飯食町（にししいじきちょう）遺跡

所在地：伏見区深草直違橋2丁目438-1（西岸寺境内）

調査期間：2012年4月4日～13日（8日間）

調査面積：約4㎡

調査担当：近藤章子

1. 調査概要

玉日姫御廟所のある西岸寺は、中世の集落遺跡である西飯食町遺跡の範囲に入っていることから、御廟所整備工事に伴い詳細分布調査（立会調査）を実施した。

玉日姫は鎌倉時代の公卿九条兼実の娘で、親鸞聖人の妻と伝えられている。その御廟所は、直径約3.5m、高さ約0.8mの円形の塚となっており、周囲はコンクリートで目地を留めた自然石を積んで化粧されている。さらにその周囲には六角形（直径4m）に石製玉垣を巡らせている。塚の上には石製の祠があり、東に向かって開口していた。

調査は塚の周囲の石積みを残したまま、その内部を掘り下げて実施した。

2. 発見した遺構・遺物

塚上面から0.5mほど下で、黄褐色の土を主体とした土饅頭状の盛土を検出した。盛土の規模は不明であるが、裾が周囲の玉垣に達することから、およそ直径4m、高さ1mと推測される。その中央、盛土の下から江戸時代後期の土師器の壺が割れた状態で見つかり、その周囲に焼骨が散乱していた。

出土した土師器の壺は、江戸時代後期の火消し壺と蓋（壺：口径16.8cm・胴部最大径23.6cm・器高16.9cm、蓋：口径21.2cm・器高2.6cm・中央に高さ1.8cmのつまみが付く）であり、火葬骨を納める蔵骨器として転用されたものと推測できる。

塚状を呈する黄褐色の盛土は、蔵骨器を埋納する塚として、江戸時代後期に形成されたものと考えられる。

また、火葬骨は同定の結果、頭骨などを含む人骨であるが、小片であるため性別・年齢はわからなかった。さらに、年代測定（放射性炭素年代測定）を試みたが、焼けてコラーゲンの抽出ができなかったために測定できなかった。

3. まとめ

今回の調査では、玉日姫御廟所内部で、蔵骨器を埋納した江戸時代後期の塚跡を検出した。検出した塚と出土した蔵骨器は、いずれも江戸時代後期のものであるが、出土骨が小片であり、焼けていることから、性別の判定や年代測定などができなかったため、考古学的には玉日姫との関連は不明である。

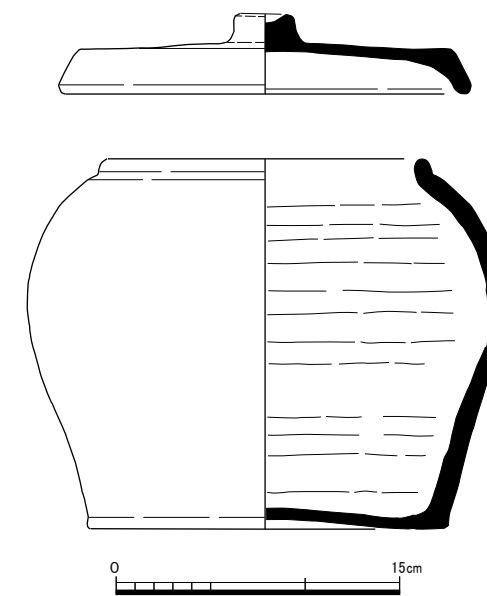
ただ、玉日姫御廟所については嘉永5年（1852）に改葬された記録があり、この点については今回の調査結果と歴史的な整合性が認められる。



江戸時代後期の塚状盛土検出状況（北から）



蔵骨器と焼骨検出状況



出土した蔵骨器（火消し壺と蓋）